

### ラーラスクエアリピーターの方の感想より抜粋:

他国の侵入によって国が分裂しましたが、アフガニスタンという国を作るのはアフガニスタンに住む人々なので、今はまだ苦しい状況だけれど、忍耐強く頑張っしてほしいと思います。  
今、私にできることは何かなと思ったのですが、こうしてラーラ会の方やレザさんにつながりながら、アフガニスタンのことに興味を持つことかなと思いました。と、同時に機会があれば、アフガニスタンのことを知ってもらえるように発信することも必要なかなと思いました。また次回も楽しみにしています。

## 忘れないで、アフガニスタン!

### ラーラスクエア第11回 シルクロードシリーズ

日時: 2025年4月26日(日) 20:00-21:30  
内容: アフガニスタンの代表的な祝祭

3月21日のノウルーズ(春分)にはハフト・メワ(七種の果実)やサマナク(蜂蜜入り米)が供され、マザリシャリフではジャヘンダ・バラ旗掲揚式が行われます。

さらに北部平原の「赤いチューリップ祭り」カブールの丘を彩る「アルガワン(ハナミズキ)の花祭り」といった季節の行事も紹介。冬のズカシ大会の熱狂、共同体のアッタン円舞、そしてヘラートからバダフシャンまで響き渡るルバブの表現豊かな弦の音色にも触れていきます。

申し込み: mrz.eedak@gmail.com



写真: ズカシ大会 (WEB)



写真: ノウルーズ飾付 (WEB)

ノウルーズ(=新しい日)は春の訪れを祝う日です。

ハフト・メワ(7種の果実)とは、

・乾燥果実やナッツを7種類混ぜてシロップに浸したもの。

例: レーズン、ドライアプリコット、ドライプラム、クルミ、ピスタチオなど。「豊穰」「再生」「家族の結びつき」を象徴しています。

苦難の続くアフガニスタンですが、人々はそれぞれの家庭でできるだけの飾付をし、ノウルーズを祝うことでしょう。詳しいことはラーラスクエアでレザさんの説明を聞いてください。

#### アフガン支援ラーラ会

代表: 柄子レザ

Mail: [mrz.eedak@gmail.com](mailto:mrz.eedak@gmail.com)

URL: <http://lala-afg.org>

郵便振替口座番号: 00930-5-249417

加入者名: アフガン孤児支援・ラーラ会

年会費: 3000円(8月~翌年7月末)

#### 運営委員の募集を継続しております!!

ラーラ通信企画編集、ラーラスクエア企画実行、名簿管理等に協力して下さる方を募集いたします。関心のある方は、レザさんに連絡し、一度運営委員会を覗いてください!



# خورنامه لاله

## ラーラ通信 52号

2026年3月18日発行



写真: タリバンの新たな刑事訴訟法のフロントページ (8am.media)

### アフガニスタンだより

2026年1月、タリバンは密かに119条からなる新たな刑事訴訟法を公布しました。新法によれば、アフガニスタン社会はカースト的な階層に分割されます。最上位はウラマー(宗教指導者)、第2階級はエリート層・富裕層・部族長、第3階級は中産階級の市民、最下層は貧困層である。さらに重大なのは、人を奴隷として所有することを法的に認めていることです。タリバンはこれを「グラーム」と呼びます。現代において、このような後進的制度の明文化は想像を絶するものであり、この新法によって原理主義的で差別的な思想が司法制度そのものに組み込まれたと言えます。

2026年1月上旬、テコンドー選手カディジャ・アフマドザデさんがジェブライル市の自宅で逮捕されました。彼女は現地協力者のZと同じ地区に住んでいました。罪状は、自宅の地下室で女性専用のテコンドー道場を運営していたことです。彼女は2週間の拘置ののち、地元の長老たちがタリバンに「二度とこのような行為はさせない」と誓約して嘆願した結果、釈放されました。



タリバンの政権奪取から4年が経過した現在も、200万人以上の女子生徒が中等教育を受けることを禁じられ、大学も女性には閉ざされたままです。さらにタリバンは、男子学生が通う大学から女性著者の書籍をすべて撤去しました。地域ベースや非公式の取り組みがごく一部の女子生徒に学習と自己啓発のわずかな命綱を提供していますが、国家的教育制度の代替にはならず、公認の資格も取れません。女性は就労と移動が制限され、家や学校の急襲、あるいはタリバンが「検査」と呼ぶ取り締まりが激化しています。「善行の普及と悪行の防止省」による検問所が頻りに設置され、女性の服装や携帯電話が検査されます。ヘラート市では、公開処刑もより露骨に行われるようになっています。

タリバンによる支配が強化されるなか、アフガニスタンはイランとパキスタンから大量の帰還者を受け入れています。人道支援資金は枯渇し、厳しい冬が到来したうえに、パキスタン国境の繰り返される閉鎖や制限は陸上輸送と貿易をさらに阻害し、家計への負担を深刻化させています。失業は広範囲に及び、収入は減少。深刻な資金不足と高まるニーズの中、基本的な食料や暖房用燃料は多くの家庭にとって手が届かない水準まで高騰しています。

レザ

## バガー孤児院のレポート 1

2025年12月、レザはバガー孤児院の管理者から、女性教師のみによる女子向けオンライン学校の開校計画について連絡を受けました。彼らはラーラ会に支援を求めてきたのです。目標はタリバン当局の正式な許可を得てプログラムを運営することです。レザ、孤児院の管理者、および教員候補者が5回以上オンラインで会議を持ちましたので、以下に内容をまとめます。

バガー孤児院は政府承認を申請中だが審査は極めて厳しく、女性教育への政府の姿勢から考えて承認見込みは低い。教材事前承認、男性参加禁止、資金は非イスラム系であることが条件。(個人寄付はOKです)。

バガー孤児院は月約4,000ドルを本プロジェクトに充当し、孤児院からラーラ会には月1,000~1,500ドルの任意支援を依頼されました。初期費用は約15,000ドル(PC・アンテナ・ルーター・設置)。生徒は英語教師とZが選抜。孤児院支援対象者の姉妹も候補。3~5名の近隣グループで学習し、PCは1人1台。中学生/高校生の2レベルを予定。1日5~7時間、主要科目を網羅し学校教育相当を目指す。ラーラ会のオンライン学校の生徒の参加は歓迎だが、対象科目・年齢層が異なるため統合するには協議が必要。

この計画は、タリバンが許可を与えない可能性が高く、上記の情報はあくまで参考情報の段階です。ラーラ会は現時点でこの計画への協力を進める予定はありませんが、バガー孤児院が女子教育の実現に向けて努力を続けていることをお伝えたく、みなさまと共有いたします。

## バガー孤児院のレポート 2

### 支援を再開します！

バガー孤児院とオンライン学校について会議をする過程で、ラーラ会がヘラートでの支援活動を中断したことも説明しました。するとバガー孤児院はラーラ会からの支援金配布に協力を申し出てくれました。

以前は現地協力者Zさんが自分の口座に多額のお金を定期的に受け取り、自分で配布してくれたのがタリバンの注意を引いたため、警察に連行されて、資金源を明らかにするよう迫られました。Zさんは「もうしません。やめます」と宣言せざるを得ませんでした。バガー孤児院は長年にわたり孤児院の経営だけでなく、ヘラートの人々がより良い生活を送れるよう様々なプロジェクトを実行してきた組織です。バガー孤児院が配布するならば、問題は起こらないと考えられるので、送金の再会を決めました。

ただし以前のような多額の送金はできません。今回復活するのは、小学校のボラティア教師4名への交通費支援です。かつては20名の女性ボラティア教師が、工夫を凝らした授業をし、その評判で定員を超えた1800名もの生徒が集まった小学校でした。

しかしこの小学校は去年3月に閉鎖されてしまいました。不思議なことに、校舎は使えるらしく、現在女性ボラティア教師が4名、生徒が数十名通ってくる非公式の学校です。教師不足と教材不足のため基礎的な読み書きしか教えられません。もしラーラ会の支援が中断せずに続いていたなら、もっとボラティア教師が残っていたかもしれない・・・そんな思いも浮かんできますが、ここはバガー孤児院の協力で、支援が再開できる目途が立った嬉しさをみなさまと共有したいと思います。

私たちは、この協力体制によって、子どもたちの教育が少しでも取り戻され、ボラティア教師の大切な活動が続けられることを心から願っています。

## バガー孤児院再び



この孤児院はレザさんの紹介で、ハザラ人の篤志家グループからの資金で運営されている私立孤児院です。2003年の設立なので、ラーラ会とほぼ同じ頃にスタートしたのです。8~16歳のハザラ人男子100名が生活を共にしていました。

最初はホールに勉強机を寄贈しましたが、その後英語教室、パソコン教室を設置。パソコンと英語ができれば将来仕事の選択肢も広がるだろうと考えてのことでしたが、これはタリバン政権の下でも変わっていないのでしょうか。



写真：Mさん(通信17号)

Mさんのことも忘れられません。院長からの要請で、シーツなどの大きなものの洗濯と小さな子供たちの世話をするためにラーラ会が雇用しました。

当時彼女は30歳くらい。4人の子供がいました。生活費を補うために仕事を探していましたが、なかなか見つかりません。そんな時にバガー孤児院で働いて、お給料がもらえるようになりました。彼女たち一家の生活の安定に役立ったことを願わずにはられません。

Aさんがアフガニстанを離れざるを得なくなった少し前、バガー孤児院から「図書室を設けたいので、支援してほしい」との依頼が来ていました。大げさなものではなく孤児院の一室に本棚を設け、机といすを並べた簡単な図書室でよいとのこと。ラーラ会もこの案に賛成し、さて打ち合わせを始めねば、と思っていた矢先にAさんが襲われると言う事件が起こったのです。

それ以来バガー孤児院とは連絡も取れなくなったのですが、この度、思いがけずオンライン学校支援の打診がありました。レザさんが書いているように、オンライン学校開設許可が出る可能性は少なく、ラーラ会が支援を考慮するような段階ではありません。とはいっても何か古い友人に再会したような、なつかしいような気分がして、つい当時のラーラ通信を繰ってしまいました。

小学校のボラティア教師の方たちにも、バガー孤児院の協力で、安全に支援金を配ることができる見込みが出てきました。アフガニстанにとって大変苦しい時代に、ヘラートの女性たちとのつながりに加え、バガー孤児院とのつながりも復活しつつあるのは、ラーラ会にとっても非常に嬉しいニュースでした。

阪長満智子

左の写真は2014年8月6日発行のラーラ通信第28号の表紙を飾りました。タイトルは「ラーラ女子奨学金 ヘラート大学 第1期生の6人」私の大好きな写真です。衣装が地味な分、健康な顔色や若さがおいたつようではありませんか。

彼女たちがいるのはバガー孤児院の一室。若い女性を6人も集めて写真を撮すのに安全な場所は、バガー孤児院しかなかった、と当時の現地責任者Aさんから聞きました。何かと協力してもらったバガー孤児院。新規支援孤児院として登場するのは2008年4月発行のラーラ通信第15号でした。



写真：バガー孤児院英語教室(通信17号)